

妖怪の杜



何時もの地下鉄のホーム。

何時もの立ち位置。

熱風と共に滑り込んで来る電車。

何時もの女性専用車輦に乗ったところで、

通勤ラッシュ時の混みようは他の車輦となんら変わらない。

毎日同じ電車で職場に行き、嫌な上司の口臭、

体臭に辟易し、お局様の嫌がらせにも耐え...

やっとの思いで仕事を終え帰宅する。

人生の疲れが肌に素直なほど表れだすお年頃。

OL、サラリーマン、人って何なのさ。

薄暗い街灯の下をトボトボ歩き、何時ものコンビニの前で立ち止まる。

今日も居た。

金髪にピアスのチャラ男...

毎日コンビニ前で、おでんのガンモを地べたにだらし無く座り頬張るあいつ。

私が夕食を買い終え出て来ると決まってナンパするこの男。

「ねえ、運命感じない？」

1ミリも感じません。

無視して歩き出そうとした時。

「君、生きていて楽しい...」

何なのコイツ。

楽しい訳ないジャン、仕事するのも生きているのも楽しいとかじゃないし...

頭の中を混乱させるような事なんて言わないで。

「何なの、何が言いたいの」

チャラ男は私の罵倒を完全無視でニコッと笑い、私の額に手を添える。

目眩ともつかない感覚に襲われ、目の前が真っ暗になる。

そして、霧が晴れるかのように...

見慣れた町並み、何時もの風景が飛び込んでくる。

けれど、そこに人は誰も居ない。

何時も夢で見る光景...何、夢、幻、催眠術。

チャラ男が手を離れた瞬間幻影は消え失せた。

同時にチャラ男も消えた...

え〜何、幽霊、お化け。

ハッ疲れている私。

そう、絶対疲れているんだ...ハハハッ。

母と息子

「って事で...あんたの父親の印象は最低最悪で幽霊かよって感じだったのよ。解った？」
金髪で勾玉のピアスをした我が馬鹿息子に父親との出会いを語ったものの理解出来たかどうか...

「ふ～ん、母ちゃんの話は何時も支離滅裂だよな。お化けて」

やっぱり、理解出来てないか馬鹿息子。

「母ちゃん言うな。ママと御呼び！たく、あんたって子は母親を馬鹿にすんじゃないわよ」

父親そっくりで高飛車な息子は呆れた眼差しを私に向ける。

「だって、チャライ男で幽霊...第一印象最悪でなんで僕が此処に存在する訳。繋がりが無いよ」
チッ、10歳のガキのくせしてマセた奴。

「まあ、その話は何れ詳しく話したげるから...それより、あんたその髪染めない。それとピアスも止めてくれると世間的に私は助かるんだけどな...しかも、あんたさあ父親似で目がジェード色だし、目立つでしょ。だからさ」

私はプライドを捨て、10歳の馬鹿息子に懇願してみる。が、聞きゃあしないだろうな。

「嫌、髪は自毛だし、ピアスは父ちゃんから預かったモノだから今更やめる気はない」

やっぱりね。

こんなんで、貴方が言った通りこの子が行動してくれるのかな？

もう、早く帰って来て京吾。

私には手に負えなくなってきたあ～

「東狐（とうこ）いい加減起きな、休みだからっていつまで寝てんのお」

私、白面涼風（はくめんすずか）。

金髪ピアスで、しかもジェード色の眼の10歳のマセがきの母親。

部屋に入るとベッドの上で愛くるしい寝顔の息子がこのクソ暑い中飼猫の孟知（めんち）と同じ格好で寝ている。

ため息が出る...

ふと、勉強机に目をやるとあの勾玉のピアス...

これだけでも隠しちゃるか。フッフ。

「何してんの母ちゃん。それは、父ちゃんから預かった大切なピアスなんだから勝手に触らないで」

いつの間に起きやがった。

「チッ、はいはい悪うごさんした。二度と触りません」

「ん？今、チッって言った、ねえ、チッって」

「言ってます。ハア、我が子の早過ぎる反抗期...私はどうしたらいいの、あなた～母子家庭は辛い...」

芝居がかった台詞を言ってみた。

「何、下手な芝居してんのさ...うち、父ちゃん居るし母子家庭じゃないでしょ」

やっぱマセがき...この性格は絶対京吾の血筋。

私じゃないわよね、きっと。

「いつ帰るかわかんない京吾をあてに出来ますかっての。あんたみたいな子を育てるのは大変なんだからね。少しは理解してよ」

なんて言ったところで聞くような子でもないか。

「ふ～ん、解った」

「えっ...」

「で、何の用」

「あっ、いや、え～と、東狐今日出かけるって言ってなかったかな」

東狐の素直な言葉に一瞬慌てた。

いや、ひっかからないぞお...絶対なんかたくらんでんだろ。

フッフ母親をナメんなよ。

「ああ、達也に頼まれてたんだっ」

「えっ、達也君になんか頼まれたの？」

「うん、まあね」

「何よ、そのまあねって...」

「ん、父ちゃんの言い付け。そろそろしないとね」

...東狐はそう言うと、勉強机にあった勾玉のピアスを着けると、

着替えを持って猫の孟知と一緒に部屋を出て行った。

そっか、私も後少しなんだね京吾...

普通のお母さんだったらよかったかな。

玄関先から、

「行くぞ、孟知。行ってくるね母ちゃん」

そう、声が聞こえた。

私は行ってらっしゃいと東孤に応える。

10歳の我が子が遠くに感じた。

始まるんだね...

シンドローム（1）

東狐が出掛けて30分ぐらいたったかな？

達也君家にそろそろ着く頃だし...

やっぱ見守る事が母としての努めだよな、京吾。

私は東狐のベッドに座り意識を集中する...あっ、居た。

しゃきしゃき歩きなつての、東狐っ。

「なあ、孟知。達也病院に容れられちゃうかな...」

これこれ、ちょっとそこまで～な犬の散歩かよ。

ビーサンぺたぺたでだらし無く歩く我が子と飼い猫。

久城という表札がかがげられた家の前で東狐達は立ち止まり、

インターフォンを1回押した。達也君の家だ。

（はい、どなた）

「あっ、東狐です。達也君居ますか」

（あら、トーコちゃん。達也居るわよ、入って）

達也君のお母さんの甲高い声を合図に家に招かれた二人...ん？一人と一匹だね。

「お邪魔します」

「いらっしゃい、トーコちゃん。達也二階に居るから。達也～トーコちゃん来たよ」

（ハ～イ、あがってもらって～）

二階から達也君の声が響いた。

東狐は大人用のスリッパに履き変えると二階へと目を向ける。

「って事だから、勝手にあがっちゃって、後でおやつ持ってくるから」

甲高い声の達也ママ、にっこり笑い。なぜか上機嫌な感じで...

トットとお台所へと向かったみたい。

東狐は、その姿を見送った後...やれやれの表情。なんか生意気！

二階へあがった我が子は達也君の部屋の前で大人スリッパのせいでこけまじく...

フッフ、ザマアみろ。

「た、達也。入るよ」

取り繕ってやんの...笑える。

「どうぞ」

中からの声と同時にドアを開けた。

達也君を目にした東狐は驚く。

想っていた以上に達也君の状態は酷かった。

両手両足、顔、見える部位はほとんどが包帯や絆創膏で覆われていたのだ。

シンドローム (2)

「達也こんなに酷かったなんて...」

「うん、今週になってから酷くなったんだ...父さんや病院の先生は僕自身が傷つけたと思ってるけど、絶対僕じゃない。信じてくれるよね、東狐」

悲しい眼差しで見つめる達也君。

話を聞いた限りでは、自傷行為にもとれるのだけれど...

「もう少し詳しく教えてくれる」

「...先週の火曜日にね僕のキッズ携帯に変なメールがくるようになって...これ」
達也君は部屋の勉強机の引き出しから携帯を取ると画面操作し東狐に手渡した。

画面を見ると、奇妙なメール...

Data : 0 0 0 0 0

from : 0 0 0 0 0

Sub : 5 2 2 3 3 2 1 5 7 1 1 4

そして、内容は...やはり、数字の羅列。制限文字数いっぱい。

7 2 4 3 2 4 4 1 2 1 5 1 9 1 3 3 0 4 5 5 9 5 1 2 2 5 9 5 3 3

7 2 4 3 2 4 4 1 2 1 5 1 9 1 3 3 0 4 5 5 9 5 1 2 2 5 9 5 3 3

7 2 4 3 2 4 4 1 2 1 5 1 9 1 3 3 0 4 5 5 9 5 1 2 2 5 9 5 3 3 ...

考え込む東狐。

「その変なメールが何通も届くんだ。拒否しても何通も何通も...その夜から変な夢を見るようになって、朝起きると体中に引っ掻き傷があって。それが段々酷くなってるんだ。僕怖くて...助けて東狐。このままじゃ本当に病院に容れられちゃう」

包帯のされた両手で顔を覆うなだれる達也君。

「夢...その夢ってどんなの」

「えっ、えっと、黒い変な生き物に襲われる夢。そいつ、何かうようよ動いて...変なところから三本爪みたいなもの出して僕の体に...」

「黒い変な生き物...三本爪...でも夢なんだよね」

「うん、それを父さんに言ったら病院に連れてかれて...トラとかウマとか変な事言われた」

「虎、馬...何それ。う～ん、僕今日泊まるよ。そしたら、何か解るかも」

「本当、嬉しい」

「じゃあ、ちょっと携帯借りるね」

「うん」

達也君のキッズ携帯を片手に部屋を出る東狐。

シンドローム (3)

♪ジャンジャンジャンジャジャジャン...

「うわっ、びっくり」

私の携帯がリビングから響き渡る。

集中してる時に電話するのは誰よ...

仕方なしに東狐の部屋を出てリビングにある携帯を手にする。

「誰...」

(僕だけど...)

あら、可愛い我子からだった。

「どうしたの」

(見てたでしょ)

「何？見てないわよ」

クソ、気づいていたかクソがきめ。

(心配感じたんですけど...)

「気のせいじゃないの」

(あっそう。まあいいけど...とりあえず今日は達也ん家泊まるから)

「あらそう。あっ、でも、もしかしたらフラッシュバック現象かもよ。」

その、メールの内容見て昔の事を思い出して自分を気づかないうちに傷つけてるのかも」

(やっぱり、見てたじゃん)

ハッ、しまった。なんて間抜けな私。

こうなったら仕方がないか。

「まあ、いいでしょ。心配だったのよ」

ふふっ、ちょっと母のそぶりアピール！

(それで、母ちゃんはどう思うの。それと、虎とか馬って何)

ちっ、まったくもってのアピールがいのない、クソ息子め。

トラウマも知らんがきのくせに...

「トラウマは過去に負った心の傷の事よ...そうね、もし達也君が心の病気の場合はあんたの出番はないかもね。達也君家族の問題になるから、あんたは何も言わずに帰る事。かな」

(ふ～ん、何となく解った。今日様子見て明日また電話するね)

何となくかよっ、大丈夫かな本当に...でも、こればかりは東狐本人が経験しないとね。

「まあ、いいでしょう。じゃあ、達也ママには後で私が連絡しとくよ」

(うん、それじゃあね)

「はい、バイ」

どちらにせよ、辛い事だよな。

今夜は徹夜になるかな...

シンドローム（４）

その夜、二人と一匹はぐっすりと寝入って居た...照明も点けっぱなしで。
相変わらず、ボクサーパンツに両手を突っ込み寝ている東狐...京吾そっくり。
孟知まで同じ格好だし、フフッ。って...おいっ、そんなんでもいいのか東狐。
まあ、達也君はあんたが泊まった事で安心して寝入るのは解るよ。
でも、あんたは違うくない。ねえ...孟知まで...やっぱがきだな。
深夜2時を過ぎた頃私もうとうとしかけた時だった。
部屋の様子が一変した...真夏だというのに、寝ている東狐達の息が白くなる。
まるで冷凍庫のように。やばくない。起きろみんな！

最初に起きたのは孟知、毛を逆立て「ウー」と臨戦体制。

しかし、他2名は未だ気付かず...

すかさず、孟知が東狐に猫パンチ！

やっと目を覚ます東狐。

何だよとばかりに周囲を見回す...

すると、天井に墨をぶちまけたような黒い物体がうねって居る。

様子を伺う東狐達に対し達也君は金縛りにでもなったかのように苦しい表情で動く気配がない。

墨色の物体はゆっくりと動きだし達也君の頭上へと移動した。

そして、雫が滴るように物体中央から墨色の氷柱が形勢され達也君へとそれは伸びていく。

尖端が3本の鋭い爪に変形した時...

パチパチ

と音を立てリン発火のような青白い炎が3本爪の尖端で弾ける。

ジュッ

墨色の物体はビクッと尖端を引き戻す。

尖端からは白い煙。

煙が治まると、そこから動物的な眼球がギョルッと飛び出し東狐へ向けられた。

突起した眼球に映し出されていたのは...寝癖だらけの東狐、金髪の髪が静電気を帯びたかのよう
に、パチパチと乾いた音を響かせゆらゆら揺れ、ジェード色の瞳が墨色の物体を凝視している

。

「達也に手を出すな...シメルぞっ」

我が子ながら怖いぞっ...物体は眼球を反らす事なく

「オバエ、ダナニモノ...ジャマズルナ...ゴ、ゴロスゾ」拙い言葉を発した。

「お前こそなんで達也に酷い事するんだ...これ以上やるんなら、滅っする」

おっ、東狐カッコイイ～アニメの主人公みたい。

「ダメレ...コヤツハ、ワシノセイイキを汚した...ダカラ、コロす」

シンドローム（5）

ブワッと墨色の物体は3本爪で東狐に襲い掛かる。

辛うじて、かわしたものの右眼下に横一文字に血が滴る...

ワッ、だ、大丈夫？

こ、こらあ孟知何やってんの、あんた傳役（ふやく）でしょう。

役に立たないなら、お仕置きとして尻尾の毛全部むしり取るわよ。

私の思考を感じとったのか、それとも今の状況を汲み取ったのか。

孟知は敵と見做した物体に飛び掛かる...

空中で淡い光を放ち孟知の体は徐々に大きくなっていった...

虎程の大きさになった時、犬のようでもあり猫のようでもある獣へと変化した。

その姿は普段の三毛猫の孟知と違い琥珀色に輝き、

額には陰陽魚太極図が浮き上がり、

筋肉の絞まった体に立派な尻尾が2本ふさふさと揺れていた。

再び襲い来る3本爪をグシュッと食いちぎり、ペッと吐き出す。

フローリングの床にゴトリと落ちた爪は不思議な事に壊れた傘と何かの金属が融合した物だった

。

墨色の物体は「グあう」と呻くと...窓を打ち破り外へと逃走した。

「申し訳ありません。主殿。私の失態で貴方様を傷付けてしまい...」

きらびやかな琥珀色の尻尾をたなびかせ反省する孟知。

「いや、大丈夫さ。達也が無事ならそれでいいよ。それより、この騒ぎ...元の姿に戻って」

「ハッ、畏まりました」

そう、言って元の三毛猫へと戻る孟知。

この騒ぎで、ようやく目を覚ます達也君。

そして、バタバタと二階に駆け上がる達也君の両親。

部屋の様子を見てア然とする。

「誰かの悪戯みたい」と金属を指差し東狐が言い訳する。

冷静な状態であれば、割れたガラス片で投げ入れたものかそうでないかは理解出来たはずだろうけど...

シンドローム（6）

次の日、帰宅した東狐と孟知に早めの昼食を用意し昨晚の事を聞いてみる。

「ねえ東狐、昨日のアレっていったいなんだったの」

ご飯を口いっぱい頬張る東狐...人の話し聞いてんのか我が息子。

「いばのほこふあかんふあい」

...

「意味不明だし、口にもものを入れたまま喋らないでくれる」

まったくこの子は...

「んぐっ。なら食べてる最中に質問しないでくれる」

ごもつとも...って、いっぺん泣かせたろか！

「それは失礼いたしました。でも、気になるんだって...怨霊、悪霊、悪魔とかだったら。達也君はどうなるのよ」

本当に霊だったら...

相変わらず、口いっぱいご飯を頬張る東狐...人の話しを聞いている。

「それなら大丈夫。霊とかじゃないみたいよ」

ひととおり食べ終えた東狐がシィハァしながら応える。

お前はおっさんか。

「霊じゃなきゃ何よ」

「う〜ん、たぶん妖怪...しかも近い、そんな感じがした」

妖怪...

東狐は食べ終えた食器類をシンクに持って行き軽く水を流す。

そうしてダイニングテーブルへ戻ると、ドツかと座る。態度デカッ。

私は考える。妖怪とすればあの携帯の数字の意味は何だろう...

もし、あの数字の羅列が妖怪のメッセージだとしたらこの事件は解決する♪
えへへ。

「ねえ東狐。達也君の携帯に届いたメールさあ...」

「ああ、アレ。メモしてきたよ」

さすが我が息子。気が利くぞ。

「えっ、見せて見せて...気が利くねえ東狐ちゃん」

よいしょとかんと後が怖いからな。それにしても汚い字だな。

メモ用紙もクチャクチャだし、よく見ればスーパーのチラシの裏面使ってるし。

でも、これを見れば見るほど何か懐かしさを覚えるのは何故。

シンドローム (7)

そんな事を考えていると、突然東狐が口を開いた。

「それ見て何か解る」

「そうねえ...ん、う～ん。あれ、あれれ、もしかして...えへへ、あははっ懐かしいはずだよ、東狐。私の青春じゃないのさコレって」

「はっ、何それ」

フッフッフ、若造には解るまい。

携帯、ピッチ、ポケベルの時代を生きた私だからこそ理解できるのよ。

中学生の頃にハマったポケベル入力文字じゃないのさ、ウフッ。

「東狐、ポケベルって知ってる」

「知らない」

即答かよ、まあ仕方ないか。

「ポケベルは今の携帯みたいに同じ機種どうしてメッセージを送受信出来る端末機の事よ」

「そっ、で何か解ったの」

それだけ...まあ、いっか。

って事は、この数字を文字にすると、Subが... (にくしおまえ) えっ。

何これ。

ほ、本文が (みつけた かならず のろいころす)

私の表情を読み取ったのか、先程までゆるんでいた東狐の顔が引き締まる。

「ねえ、母ちゃん。何か解ったんなら教えて...」

東狐の表情は真剣そのものだった。

私は何も言わず、メモ用紙に次のように書き加えた。

522332157114

にくしおまえ

724324412151913304559512259533

みつけた かならず のろいころす

と。それを見た東狐は、メモを手にとると下唇を噛み、チッと言い放つと家を飛び出した。

勿論孟知も一緒に...

一番大切な友達の為に。